

読上競技コレクション #8

安宅之関モデル〈下〉

北海道 西村 友幸

前回は叙述したように、読み手のための読上競技において、競技者すなわち読み手が、白紙を受け取っているがあたかもそこに読上算の問題が書かれているように朗々と読み上げれば、それは「勸進帳読上」である。

昭和 50 年代に誕生した“読みコン”こと珠算読上コンクール全国大会が、40 年の時を越えて「安宅之関モデル」として今ここに甦る。

天も響けと、読み上げたり！

競技方法

表組と裏組の二手に分かれて団体対抗戦を行う。それぞれのチームは 5 名のメンバーから構成され

る。2つのチームが読み手（＝弁慶役）と聞き手（＝関守役）を交互に 10 回繰り返し、得点を競い合う（表 1 参照）。

読み手はメンバー各々が輪番で担う。表組のメンバーを、読み上げる順に甲・丙・戊・庚・壬とする。ラストの壬が表組の大將である。対する裏組のメンバーを、読み上げる順に乙・丁・己・辛・癸とする。ラストの癸が裏組の大將である。

一人の読み手に対し、聞き手は相手チームの全員が務め、読み手が勸進帳読上をしていないかどうか検証する。チームの統一見解を公表する権限は大將のみが有することにしよう。

試合は 10 回（イニング）までであるため、読み

表 1

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
表組	読み手	甲	丙	戊	庚	壬	甲	丙	戊	庚	壬	
	問題	黒	黒	黒	白	黒	白	黒	白	白	白	
	裏組回答	白	黒	黒	黒	白	黒	白	白	白	黒	
	正誤	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×	
	得失点	1	-2	-2	4	1	2	1	-2	-2	2	
裏組	読み手	乙	丁	己	辛	癸	乙	丁	己	辛	癸	
	問題	白	白	黒	白	黒	黒	白	白	黒	黒	
	表組回答	白	黒	白	白	黒	白	黒	黒	黒	白	
	正誤	○	×	×	○	○	×	×	×	○	×	
	得失点	-2	4	1	-2	-1	1	2	2	-2	1	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
得点	表組	3	0	0	6	2	2	1	0	2	2	18
	裏組	0	6	3	0	0	1	2	4	2	1	19

手のローテーションは二巡する計算になる。ただし、後述のルールにより、試合は実質的には最長でも9回までに終わる。それゆえ、ローテ最後尾の大将が読み手を二度務める可能性はない。

主催者は1セット10枚の問題カードを2セット用意し、試合開始直前に一方を表組に、もう一方を裏組に配る。どちらのセットにも、問題がきちんと印字されたカードは5枚しか含まれていない(表1の【問題】欄に「黒」と表記)。残り5枚(同じ欄に「白」と表記)には「加減算3桁～6桁15口」といった仕様のみが記載されている。表組用セットの中の「黒」は第1、2、3、5、7問。「白」は第4、6、8、9、10問。「黒」と「白」の並びは主催者が専決するものとする。

「黒」に当たった読み手は、印字された問題をそのまま読み上げる。「白」に当たった読み手は、そこに指示されている仕様(例：加減算3桁～6桁15口)にしたがって「勸進帳読上」を行う。

聞き手チームは、相手チームの読み手が問題を読み終えた後、所定時間内に集団で協議し、結論を大将が代表で述べる。大将は、勸進帳読上が行われたと判断される場合には「白」、そうでない場合には「黒」と口頭で回答する。回答が当たっていれば読み手チームが失点(聞き手チームが得点)し、外れていれば読み手チームが得点(聞き手チームが失点)する。

このゲームには、聞き手は「白」の回答も「黒」の回答も最大5度しかできないというルールがある。裏組は、9回までに「白」を使い切り、最終10回の回答は自動的に「黒」扱いとなった(表1の【裏組回答】欄では「黒」の字に下線を引いてこのことを表現)。そのため、10回の表組当番の壬が問題を読み上げる必要はなくなった。一方の表組は、9回までに「黒」を使い切った。最終10回の回答は自動的に「白」扱いとなり、裏組当番の癸も問題を読み上げる必要がなくなった。

表1右下の【計】欄を見てのとおり、試合は18対19で裏組が勝利した。

得失点

表1の【得失点】欄には、-2、-1、1、2、4のうちのどれかが記されている。負数は、読み手が白黒を聞き手に見破られ、相手に得点を献上してしまったことを意味する。正数は、聞き手が誤答し読み手が得点したことを意味する。

聞き手チームの大将は、読上に対して「白」または「黒」と回答するが、「黒」を告げる場合に限り、得点を倍増すべく合図を出す権利を行使できる(表1の【裏組(表組)回答】欄では「黒」の字を四角で囲んで権利行使を表現)。もっとも、この権利は諸刃の剣で、正解ならば得点は倍、不正解ならば失点も倍という性質のものである。

以上より、試合中に起こりうる得失点の事象は次のA)～F)の6通りということになる。

①問題が「黒」の場合

- A) 聞き手が「白」と誤って回答→読み手に+1点(聞き手は-1点)
- B) 聞き手が権利行使せずに「黒」と正しく回答→聞き手に+1点(読み手は-1点)
- C) 聞き手が権利行使して「黒」と正しく回答→聞き手に+2点(読み手は-2点)

②問題が「白」(勸進帳読上)の場合

- D) 聞き手が「白」と正しく回答→聞き手に+2点(読み手は-2点)
- E) 聞き手が権利行使せずに「黒」と誤って回答→読み手に+2点(聞き手は-2点)
- F) 聞き手が権利行使して「黒」と誤って回答→読み手に+4点(聞き手は-4点)

終わらない魂

残念ながら本稿をハッピーエンドで締めくくることはできない。昭和54年度“読みコン”の優勝者は再入院を余儀なくされた。その翌日の2020年11月3日、私は本稿を書き上げた。いつしかまた“幸四郎の奇跡のはなし”を読者にお伝えできると信じながら。

次回は「連唱合奏モデル」を紹介する。

(小樽商科大学大学院教授)